Osaka University Knowledge Archive

Title	外来通院中の独居高齢糖尿病患者の支援ニーズに基づく支援方法の検討
Author(s)	宮脇, 慈子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55798
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　宮脇　慈子　）	
論文題名	外来通院中の独居高齢糖尿病患者の支援ニーズに基づく支援方法の検討

論文内容の要旨

【研究背景】

少子高齢化が進む我が国では、独居高齢者数が2008年の435万人から2013年には573万人に増加し、2035年には762万人に達することが予測されている。また、糖尿病患者の高齢化も進んでおり、独居の高齢糖尿病患者が増加していると考えられる。糖尿病の治療においては食事療法や運動療法などの自己管理が重要なポイントとなるが、サポートを受けづらい独居では、高齢者が自己管理を継続することが困難な場合も多い。先行研究では、訪問介護や看護を受けている独居高齢糖尿病患者を対象とした研究はみられるが、こうしたサービスを受けずに外来通院をしながら自己管理を行っている独居高齢糖尿病患者を対象とした研究はなく、独居高齢糖尿病患者がどのような支援を医療者に求めているのか明らかにされていない。

【目的】

本研究では、外来通院中の独居高齢糖尿病患者の支援ニーズ明らかにすることによって、独居高齢糖尿病患者の重症化予防とともに、外来を拠点とした地域で暮らす独居高齢糖尿病患者の支援のあり方を検討することを目的とする。

【方法】

１．高齢糖尿病患者の支援ニーズ質問紙の作成

外来通院中の高齢糖尿病患者の支援ニーズを調査するための自記式質問紙を作成した。質問紙は①支援ニーズに関する質問項目、②居住地域、同居家族の有無、ADLの状況などは対象者の背景を把握するための質問項目、③短縮版糖尿病セルフケア能力測定ツールで構成されている。①については先行文献や専門家の意見をもとにして独自に作成しプレテストを行い、③については質問項目の妥当性・信頼性を検証したのち調査を行った。

１）支援ニーズに関する質問項目の作成

関連する10文献と3つの全国調査と糖尿病看護認定看護師3名へのインタビューから支援ニーズに関する質問項目を抽出して、92の質問項目を作成した。作成した質問項目について、外来通院している65歳以上の糖尿病患者10名を対象にプレテスト行い、質問内容の分かりやすさの検討と得点の偏り状況や回答所要時間から質問項目の選定することで表面的妥当性を検討した。その結果、自己管理、サービス活用、生活や自己管理への思いについての内容を含む45項目4段階評定尺度の質問項目となった。

２）糖尿病セルフケア能力測定ツール短縮版の作成と信頼性と妥当性の検討

先行研究において信頼性、妥当性が検証されている54項目からなる糖尿病セルフケア能力測定ツールについて、研究に承諾の得られた糖尿病患者368名が糖尿病セルフケア能力測定ツールとSelf-care Agency Questionnaireに回答したデータを用いて、短縮版の作成を行い、信頼性と妥当性を検証した。

短縮版の作成（項目削除）は、級内相関係数（ICC2）を用いて実施し、最終的にどの項目を選択するかは下位尺度のCronbach αを評価して決定した。ICC2を用いて尺度の短縮化を行った結果、７因子３５項目となった。短縮版の下位尺度のchronbach αは0.637～0.844で、全体のchronbach αは0.893であった。再検査信頼性係数は、尺度全体で0.785であった。SCAQとの相関係数は0.622と高い相関がみられ($p<.001$)、短縮版と調査3か月後のHbA1cと有意な相関係数は全て0.2未満と低値であった。短縮版のモデル適合度指標は、$\chi 2(543) = 1,374$, $p = 0.00$、TLI=0.794, CFI = 0.822、RMSEA=0.064で、元尺度に比べ適合度は改善していた。

２．調査方法

訪問介護や看護を受けずに外来通院を行っている65歳以上の糖尿病患者を対象に、２つ病院および診療所の３施設の外来で行った。研究協力について同意の得られた対象者に１で作成した自記式質問紙を外来で配布し、対象者の希望

に応じてその場で、あるいは郵送法にて質問紙を回収した。対象者に求められた場合には、質問項目を読み上げるなどその場で回答ための支援を行った。分析は、高齢糖尿病患者が外来に求める支援ニーズを探索するために支援ニーズに関する質問45項目について探索的因子分析を行い、因子負荷量が0.3以下の項目削除を繰り返しながら潜在的な支援ニーズ構造の探索を行った。その結果をもとに共通したニーズをもつ独居者の特徴を明確にするために階層的クラスター分析を行った。クラスター数は、得られる支援ニーズの特性とクラスター数の実用性を評価することによって決定した。その後、各クラスター群間の患者属性を比較検討した。

【結果】

636人に質問紙を配布し、634人から回収した（回収率99.7%）。このうち632人（有効回答率99.7%）を分析対象とした。対象者のうち独居者が104名で、同居者は528名であった。平均年齢は独居者が74.3歳±6.2、同居者は73.3歳±5.8であった。独居者の17.3%は要介護度が要支援であり、同居者の要支援は5.5%であった。また、独居者の31.7%は体調不良時に頼れる人がいなかった。

因子分析の結果、高齢者(n=632)の支援ニーズは【教室や集いの希望】、【緊急時対応を含む個別相談の希望】、【生きる支えや希望がない】、【食事準備の困難】、【安全な薬物療法の希望】の5因子23項目となった。5因子のCronbach αは0.42～0.87で、全体のCronbach αは0.74であった。また、5因子の累積寄与率は34.7%であった。

因子分析で明らかになった5因子に基づいて対象者のうちの独居者(n=104)について階層的クラスター分析を行った結果、クラスターは7つに分類され、支援ニーズの得点の特徴から《教室や集いによる支援希望群》《集団・個別を含む自己管理支援希望群》《自己管理支援とともに生きる支えの支援希望群》《生きる支えや希望がもてる暮らし支援群》《食事準備支援群》《食事準備支援とともに生きる支えの支援希望群》《特別な支援を希望しない群》と命名した。糖尿病歴の平均は《生きる支えや希望がもてる暮らし支援群》が17.4年±12.0、《食事準備支援群》が17.4年±10.6と最も長く、《教室や集いによる支援希望群》が14.1±13.0最も短かった。HbA1cは《食事準備とともに生きる支えの支援希望群》が8.0%±1.5で最も高く、《教室や集いによる支援希望群》が7.0%±1.0と最も低かった。《特別な支援を希望しない群》は7.2%±0.7であった。

【考察】

本研究により外来通院中の独居高齢糖尿病患者の支援ニーズが明らかとなった。《教室や集いによる支援希望群》のようにそれを通じて他者との繋がりを求めていたり、《自己管理支援とともに生きる支えの支援希望群》のように、自己管理支援を通じてその基盤となる独居生活の中での生きる支えを求めているなど、顕在する自己管理のための支援ニーズだけでなく、その背後には独居で暮らす生活支援ニーズが潜在することを念頭におく必要があることを示唆していると言える。また、《食事準備とともに生きる支えの支援希望群》は他の群と比較してHbA1cが最も高かったことから、食事準備などを含めた生活基盤を支える支援の不足が血糖コントロールの悪化につながる状況を生んでいる可能性があると考えられ、独居高齢者においては、特に、サポート体制の不足が予測されるので、生活基盤の問題を明らかにしその解決策を優先する必要がある場合もあると考えられた。本研究により外来での患者間あるいは患者-医療者間のつながりを通じた外来を拠点とした地域で暮らす独居高齢糖尿病患者の支援のあり方についての示唆を得ることができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　宮脇　慈子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	清水　安子
	副 査　教授	神出　計
	副 査　教授	井上　智子

論文審査の結果の要旨

【研究背景】

少子高齢化が進む我が国では、独居の高齢糖尿病患者が増加している。先行研究では、すでに在宅で介護や看護を受けている独居高齢糖尿病患者を対象とした研究は様々みられるが、現在ほぼ自立生活を送り外来通院をしながら自己管理を行っている独居高齢糖尿病患者を対象とした研究は国内外ともにみられず、独居高齢糖尿病患者がどのような支援を医療者に求めているのか明らかにされていない。

【目的】

本研究では、外来通院中の独居高齢糖尿病患者の支援ニーズ明らかにすることによって、独居高齢糖尿病患者の重症化予防とともに、外来を拠点とした地域で暮らす独居高齢糖尿病患者の支援のあり方を検討することを目的とする。

【方法】

１．高齢糖尿病患者の支援ニーズ質問紙の作成

外来通院中の高齢糖尿病患者の支援ニーズを調査するための自記式質問紙を作成した。質問紙は1)支援ニーズに関する質問項目、2)糖尿病セルフケア能力測定ツール短縮版で構成されている。

１）支援ニーズに関する質問項目の作成

関連する13文献と糖尿病看護認定看護師3名へのインタビューから支援ニーズに関する質問項目を抽出して、92の質問項目を作成した。作成した質問項目について、外来通院している65歳以上の糖尿病患者10名を対象にプレテスト行い、表面的妥当性を検討した。その結果、45項目の質問項目となった。

２）糖尿病セルフケア能力測定ツール短縮版の作成と信頼性と妥当性の検討

先行研究において信頼性、妥当性が検証されている54項目からなる糖尿病セルフケア能力測定ツールについて、先行研究で収集したデータを使用して短縮版の作成を行い、信頼性と妥当性を検証した。

短縮版の作成（項目削除）は、級内相関係数（ICC2）を用いて実施し、最終的にどの項目を選択するかは下位尺度のCronbach αを評価して決定した。尺度の短縮化を行った結果、７因子３５項目となった。短縮版の下位尺度のα係数は0.637～0.844で、全体のα係数は0.893であった。再検査信頼性係数は、尺度全体で0.785であった。SCAQとの相関係数は0.622と高い相関がみられ(p＜.001)、短縮版と調査3か月後のHbA1cと有意な相関係数は全て0.2未満と低値であった。短縮版のモデル適合度指標は、$\chi 2(543) = 1,374$, $p = 0.00$、TLI=0.794, CFI = 0.822、 RMSEA=0.064で、元尺度に比べ適合度は改善していた。

２．調査方法

訪問介護や看護を受けずに外来通院を行っている65歳以上の糖尿病患者を対象に、３施設の外来で行った。研究協力について同意の得られた対象者に１で作成した自記式質問紙を外来で配布し、対象者の希望に応じてその場で、あるいは郵送法にて質問紙を回収した。分析は、高齢糖尿病患者が外来に求める支援ニーズを探索するために支援ニーズに関する質問45項目について探索的因子分析を行い、その結果をもとに共通したニーズをもつ独居者の特徴を明確にするために階層的クラスター分析を行った。その後、各クラスター群間の患者属性を比較検討した。

【結果】

636人に質問紙を配布し、634人から回収した（回収率99.7%）。このうち632人（有効回答率99.7%）を分析対象とした。対象者のうち独居者が104人で、同居者は528人であった。平均年齢は独居者が74.3歳±6.2、同居者は73.3歳±5.8

であった。独居者の17.3%は要介護度が要支援であり、同居者の要支援は5.5%であった。また、独居者の31.7%は体調不良時に頼れる人がいなかった。
因子分析の結果、高齢者(n=632)の支援ニーズは【教室や集いの希望】、【緊急時対応を含む個別相談の希望】、【生きる支えや希望がない】、【食事準備の困難】、【安全な薬物療法の希望】の5因子23項目となった。5因子のα係数は0.42～0.87で、全体のα係数は0.74であった。また、5因子の累積寄与率は34.7%であった。
因子分析で明らかになった5因子に基づいて対象者のうちの独居者(n=104)について階層的クラスター分析を行った結果、クラスターは7つに分類され、支援ニーズの得点の特徴から《教室や集いによる支援希望群》《集団・個別を含む自己管理支援希望群》《自己管理支援とともに生きる支えの支援希望群》《生きる支えや希望がもてる暮らし支援群》《食事準備支援群》《食事準備支援とともに生きる支えの支援希望群》《特別な支援を希望しない群》と命名した。クラスター毎の割合は順に、9.6%、9.6%、13.5%、16.3%、9.6%、7.7%、33.7%であった。
糖尿病歴の平均は《生きる支えや希望がもてる暮らし支援群》が17.4年±12.0、《食事準備支援群》が17.4年±10.6と最も長く、《教室や集いによる支援希望群》が14.1±13.0最も短かった。HbA1cは《食事準備とともに生きる支えの支援希望群》が8.0％±1.5で最も高く、《教室や集いによる支援希望群》が7.0％±1.0と最も低かった。《特別な支援援を希望しない群》は7.2％±0.7であった。
【考察】
本研究により外来通院中の独居高齢糖尿病患者の支援ニーズが明らかとなった。《教室や集いによる支援希望群》のようにそれを通じて他者との繋がりを求めていたり、《自己管理支援とともに生きる支えの支援希望群》のように、自己管理支援を通じてその基盤となる独居生活の中での生きる支えを求めているなど、顕在する自己管理のための支援ニーズだけでなく、その背後には独居で暮らす生活支援ニーズが潜在することを念頭におく必要があることを示唆していると言える。また、《食事準備とともに生きる支えの支援希望群》は他の群と比較してHbA1cが最も高かったことから、食事準備などを含めた生活基盤を支える支援の不足が血糖コントロールの悪化につながる状況を生んでいる可能性があると考えられ、独居高齢者においては、特に、サポート体制の不足が予測されるので、生活基盤の問題を明らかにしその解決策を優先する必要がある場合もあると考えられた。
本研究により外来での患者間あるいは患者-医療者間のつながりを通じた外来を拠点とした地域で暮らす独居高齢糖尿病患者の支援のあり方についての示唆を得ることができた。
今後益々独居高齢者が増加することが予測される中、632人のデータを根拠に、多くの糖尿病患者が通院する外来での効率的・効果的な支援のあり方を検討する上での方向性を示し、また、糖尿病であること、外来通院が出来ていることを強みと捉え、介護予防の観点も含め、地域と連携した糖尿病患者支援の展望を示すことができたことから、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと評価する。